

廣瀬淡窓とその世界

咸宜園の入門者をめぐって

原 千里

はじめに

日田の咸宜園では、全国六八カ国のうち六六カ国からやって来た様々な身分の人たちが学んだ。その数は、淡窓時代二九一五名、青邨時代三九〇名、林外時代八〇七名―総数四一一二名。入門簿が確立したのは文化四（一八〇七）年の桂林園と称した時代である。したがって、それ以前の記録ははつきりしない。

咸宜園は、淡窓、青邨、林外が塾生の指導にあたった時代（含成章舎、桂林園）を「咸宜園前期」と呼ぶことにする。さらに、明治四（一八七一）年に唐川即定が第五代塾主となり、第一〇代塾主勝屋明浜が明治三〇（一八九七）年に咸宜園を閉塾するまでを「咸宜園後期」とする。時代の波に翻弄された咸宜園後期だと言えよう。明治五（一八

七二）年に、明治政府は国策として「学制」を發布して、「塾の時代」から「学校の時代」へと大きく舵を切った。その後、それまでの塾は衰退の一途。その社会的使命を終えつつあった。咸宜園もその例外ではなかった。時代の流れには抗しきれなかったのである。

咸宜園の前期と後期では、その様相が大きく違っていた。咸宜園で学んだ人たちは、後期も加えると五〇〇〇名を超えるかと推測される。入門簿に記載されていない例も珍しくない。

本稿では咸宜園前期について考查する。

（注） 第二代咸宜園主は淡窓の実弟旭荘であるが、塾生の教授は淡窓が断絶することなく続けた。さらに、塾政も淡窓の影響下にあった。故に、旭荘時代は除外。また、旭荘の「大坂咸宜園」の門生もその数に入れていない。

（一）咸宜園教育の開かれた性格

咸宜園における教育の根本的特徴は、一言で言うところ「開かれた性格」である。『広瀬淡窓』（吉川弘文館）の著者である井上義巳氏は、同書で、次のように述べている。

「ここでいう、『開かれた性格』には大きな制約が付随することは当然であるが、われわれは①その教育が、直接的に封建体制の強化を目指すものでない②その教育が、封建的身分関係を問題にせず、むしろ個性や能力に注目してそ

らう。

咸宜園では、武士の出身者は全体の六・四パーセントと極めて少なかった。このことは、何を意味しているのだろうか？。

「咸宜園の教育は、封建幕藩体制に資することはなかった」。さらに言えば、「封建支配勢力の強化に荷担することのない、前述の『開かれた性格』をその教育が目指していた」ということになる。

僧侶は、全体の三三・八パーセント。全体の約三分の一。その三分の二が浄土真宗と推定される。このことが何を暗示しているのか？。後で触れることにする。

（三）武士の入門者

武士の入門者二六三名のうち、日田代官府から六四名。諸藩から一九九名。武士の四分の一が日田代官府に所属していた。このことから、少人数の代官所の役人やその子弟たちが、咸宜園で学んだということが分かる。

武士とその他の入門者を区別して扱うことは咸宜園ではなかった。

諸藩の入門者一九九名のうち、九州諸藩出身者は一六七名。九州以外の諸藩からは三二名。諸藩の入門者の八四パーセントは、九州諸藩からであった。

の発展を志向する③学統学派に緊縛することがない④時勢を学びそれに対応する力を身につけさせる性格がある⑤個人の内的開発を如何に達成させるかについての独特な工夫が、その教育指導の中に存在する⑥自己の未来を拓いていく意欲を培う性格が存在する、などが明確に指摘されるとき、その教育に開かれた性格があると考えられる。

この「開かれた性格」こそが淡窓・咸宜園における教育の真髄である。

（二）どのような人たちが咸宜園で学んだか？

冒頭で述べたように、咸宜園では様々な身分の人たちが学んだ。武士や僧侶をはじめ、医師、商人、農民、神官、修験者などが学んだ。武士と僧侶の身分は、入門簿で確認することができる。だが、その他の確認は推察の域を出ない。

本稿では、武士、僧侶、その他の区分で考察していく。

淡窓、青邨、林外の各時代の入門者の総数は、四一一二名。武士、二六三名（六・四パーセント）。僧侶、一三九三名（三三・八パーセント）。その他、二四五六名（五九・八パーセント）。林外の時代には、武士の占める割合は、一〇・五パーセントに増加。その理由として、林外の時代は幕末、明治五（一八七二）年までの政治的激動期。その影響を直に受けたためだと考えられる。当然の成り行きであ

(四) 僧侶の入門者

一三九三名の僧侶の出身地は、全国五七カ国という広範囲に及んでいる。九州からは七〇パーセント。

咸宜園入門僧侶の三分の二が浄土真宗。残りの三分の一を浄土宗や禅宗などの僧侶が占めた。

「入門僧侶の三分の二が浄土真宗」ということは、何を意味しているのだろうか？。浄土真宗僧侶たちに咸宜園入門紹介ルートが存在していたと推察される。「そのことが、咸宜園が安定的に入門者を確保してきた理由の一つである」と言っても過言ではなさそうである。注目すべきことである。

九州以外では、浄土真宗の先進地域と言える長門、周防、安芸、摂津、美濃からの入門者が多い。その数は、約一七三名に達している。これらの地域における浄土真宗の寺院は、経済的に豊かであったと考えられる。あくまで推察の域を出ないが。

(五) 女性の入門者

天保二(一八三一)年四月一三日に、二人の女性が入門している。二人とも美濃大野郡伊尾の慈溪寺の尼僧であった。日田光圓寺の紹介で入門。智白(二九歳)と智参(二〇歳)であった。女性であるが故に入塾させられず、同寺に間借りさせ通塾させた。淡窓は『懐旧楼筆記』(巻三

〇)に「智白、智参ハ禅宗ノ尼ナリ、外宅ヲカリ、往来シテ書ヲ読メルナリ」と書き残している。月旦評にランクされることはなかったが、「二尼在レ中」の記録がそこには残っている。智参は在塾四カ月。智白は一〇カ月であった。

二人が一年に満たない短期間で退塾した理由は、推察するしか方法がない。おそらく、淡窓に直接教えを受けることができず、失望したのであろう。当時、淡窓は持病に苦しみ講義を休むことがよくあった。「官府の難」に対処するため一時引退を装っていた。淡窓が、心身共に追い詰められていたことも間違いない。二人の女性に、あまり関心がなかったことも考えられる。彼女たちのことについて、淡窓はほとんど書き残していない。筆まめな淡窓にしては意外である。退塾の理由について、書き残された物は全く見あたらない。

二人の女性は、期待外れの塾での生活に耐えられなかったのではなからうか？。あくまでも推察にすぎないが。

(六) その他の入門者

武士と僧侶の身分は入門簿で分かるが、それ以外は確認が困難である。

入門者の約六割を占めるその他の身分の人たちがどのような人々かはつきりしないのは残念としか言いようがない。だが、名前や出身地から判断して、大ざっぱに次のことが

言える。

(1) 医師の子弟

(2) 都市の裕福な商人の子弟

(3) 農村の庄屋などの子弟

(4) 神官、修験者

医師の子弟が実に多いが、神官や修験者は比較的少ない。

全体的に見れば、咸宜園で学んだ人たちは、ほんの一部の富裕層。「貧困層にとって塾で学ぶことは縁遠かった」と言える。咸宜園の学費は、年間で六両二、三分。全国的に見ると平均的などころではあるが、誰でも払える金額ではない。修業年限はない。人によっては、物になろうとすれば長期間に及ぶ場合もある。三年や四年はさらである。自分が納得したときが大帰(卒業)。今日の大学と比較してみると、その実態がよく分かる。

おわりに

咸宜園で学んだ人たちの分析からも、淡窓が封建幕藩体制に対してどのような思いを持っていたかが分かる。さらに、淡窓の著書『迂言』の「国本」の項目にも、その思いを読み取ることができる。そこで、淡窓は武士階級が改めらるべきことを「六幣習」と指摘している。①諸大名やその群臣が思いがたって偉そうに振る舞っている②諸大名が虚

勢を張って金銭を浪費している③何事も秘密にして隠し閉鎖的になっている(諸事秘密閉固)④家柄が能力と関係なくその価値判断の根拠になっている⑤前例主義。何事も先例、仕来りによって行う⑥読み書きができず不学(文盲不学)——と述べ、封建幕藩体制を痛烈に批判している。「迂言」とは、迂闊者のまわりくどい言葉、という意味である。淡窓は著者名を出さずこれを出版した。大塩平八郎の乱が起きた直後で、官府の難が降り懸かることを警戒したものと考えられる。

引用・参考図書

- 井上義巳『広瀬淡窓』(吉川弘文館)
- 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』(ミネルヴァ書房)
- 日田郡教育会『淡窓全集』(増補三巻、思文閣)
- R・ルビンジャー『私塾』(サイマル出版会)
- 中島市三郎『咸宜園教育発達史』(佐伯印刷株式会社)
- 参考論文
- 川邊雄大「明治期における東本願寺の清国布教について」(咸宜園教育研究センター研究紀要第二号)